

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
氷瀑にかつと歩むを嫁とせり	一月の一斧に伝う応（いらえ）かな	初炊ぎ地雷や不発弾のことを	型録（かたろぐ）の世に古歌留多美しき	タブラ・ラサ全方位なる初空の	かつて恋楓（ふう）の実殻を燠の上	半纏でアタラクシアを逸れたる	六花無尽の軋消えるまで	枯草に枯草を踏む歩かな	縄綯や君もまた死に養わる	しんとしてやがて冬木立と揺れる	オリオンをなぞりて嫁と姑は	冷たさの形に拾う小枝かな	白という誠濃き色初雪す	弥終（いやはて）の夕紅の冬の川	したわしき侘助程の小鉢かな	浜焚火彼を近々詣でんと	いざ野放白息を揺曳（ひるがえ）し	ほどきゆく紙片の舟や冬籠り	陰莖に刹那の力牡丹燠	短日は風の兆も只ならず	天地の眸を廻る焚火かな	火禽（かきん）来よ燠闌の極なり	狼の屍を分ける人だかり	風葬や虎寒天に喉展（ひら）く

50 朝涼や信号待の具（つぶ）さなる  
 49 夏未明眼に毒や戻りけん  
 48 ほろろなる土釜の縁や入学す  
 47 鳥風や米櫃満たす流元（ながしもと）  
 46 真言の落花一片飛花の内  
 45 まじろげば幼きままや花吹雪  
 44 フリージア母は今祖母となり  
 43 藤棚に暴君の骨譲られし  
 42 花冷の円天一羽吾を鉤（かぎ）す  
 41 しずかにも燠闌や涅槃吹  
 40 引鳥の次へ引きしを束の間に  
 39 慎膜に余す広さを水の春  
 38 どの鉄も千年の砂水温む  
 37 三生を貝寄の風ちりちりち  
 36 春月や浦波に隈太々と  
 35 如月の三和土を月の面とも  
 34 漂着の甘橙や風烈（はげ）し  
 33 水を嘯むようなる梅の匂かな  
 32 雉鳴きて雉と私ばかりなり  
 31 落椿色欲忘れかけたるも  
 30 超常と養虎侍らす肥椿  
 29 家榆を肉叢（ししむら）の水懐かしく  
 28 うすらかに山を色なす冬芽かな  
 27 眼裏に待春の水あることを  
 26 風花すなんのことなきつれあい

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
破 小 屋 に 馬 現 れ る 大 西 日	手 花 火 の 液 （ え き ） の 火 と な る 力 か な	炎 天 に 朱 一 笛 や 置 か れ あ る	鍛 造 の 汝 風 草 を 生 ま れ し や	あ な た よ り 赤 富 士 を 為 す 光 か な	す こ し 経 ち 現 の 証 拠 も 蛍 川	ほ う た る を そ の 界 隈 に 住 む 人 と	梅 雨 山 の 殊 に 奥 よ り 筆 の 香	額 花 に 殺 業 思 う 仕 方 な さ	外 の 刻 （ と の と き ） に 打 水 の 音 つ も り ゆ く	い な く な り 白 雲 木 （ は く う ん ぼ く ） に い た よ う な	草 蓮 華 魂 に 色 あ る な ら ば	青 梅 の 如 き ご 縁 に 終 ら れ し	便 追 の 唄 を 栞 と し て 降 （ く だ ） つ	水 馬 の 影 今 生 の 重 さ あ る	よ き 人 よ 私 は 水 す ま し と い ま す	夕 河 鹿 水 の 体 に 脳 （ な ず き ） あ り	万 緑 に 雨 一 切 は 加 速 せ ず	氷 水 ふ と 眼 鏡 の 遺 影 め く	一 寸 の 火 付 の 黙 や 不 如 帰	金 魚 玉 夕 紅 に 火 酒 （ ウ オ ト カ ） し て	か く 生 き て 今 清 狂 と 大 瑠 璃 と	包 丁 を 拭 い て 外 は 水 の 五 月	忘 形 や 初 夏 の 雨 筆 を 拍 （ う ） つ	ふ れ ず と も 手 触 を 成 し 袋 角

100 なにをたがやしてきたのだらうか  
 99 胡乱なる歯車としてイ（たたず）めり  
 98 型式や母川は鮭を弔わず  
 97 転生の大天蓋を白鳥燃ゆ  
 96 月葬（げっそう）も哀痛定かには非ず  
 95 アポリアの如き汀を火の腕  
 94 宿木に焔点かばや風狂す  
 93 虫入琥珀昔約束したような  
 92 団栗や迅重（じんじゅう）と沼穿ちたる  
 91 戸闕（とじきみ）を礼儀正しう火焚鳥  
 90 九月尽全天一羽杳として  
 89 蝸や誰も笑ってはいない  
 88 相槌の度蝸のこゑうねる  
 87 君が再（また）七節目に好まれり  
 86 ひとつ手に倂（おもかげ）兆す田刈かな  
 85 秒未満或る秋蝶と蟀谷（こめかみ）の  
 84 秋天は百の辺りを呆けたる  
 83 始まりや糸瓜の水に連なりて  
 82 なにもせずに大花野を去りぬ  
 81 ふと欠ける瞬（とき）の孕みや稲の花  
 80 富草の花を便（よすが）として忘る  
 79 ゆくりなき川を赤卒（せきそつ）そのように  
 78 生きにくく在り今夕（こんゆう）の美しき  
 77 平生（へいぜい）と絶望の間を青蛙  
 76 炎風の魂一閃や佇みぬ